

東邦大学学術リポジトリ



OPAC

東邦大学メディアセンター

タイトル	医師を志したマインドを「総合診療」に込めて
別タイトル	General medicine with our original will to become a doctor
作成者（著者）	瓜田, 純久
公開者	東邦大学医学会
発行日	2017.9
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 64(3). p.206 207.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	教室(診療科)紹介
著者版フラグ	publisher
JaLDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.2017.64 03 206
メタデータのURL	https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD73220519

教室(診療科)紹介(106)

医師を志したマインドを 「総合診療」に込めて

総合診療・救急医学講座

教授：瓜田純久（内科）
中嶋 均
（先端健康解析センター）
島田長人（外科）

講師：財 裕明
医局長：宮崎泰斗

東邦大学総合診療科の歴史は平成15年4月に旧第2内科の杉本元信先生が東邦大学医学部教授に就任され、総合診療・急病センターを開設した日に始まりました。翌年、外科に島田長人先生、本田善子先生が着任、吉沢定子先生が感染管理部を立ち上げ、平成17年に青森で開業していた瓜田純久が助手として大学に復帰し、現在の体制になりました。その後、中嶋均先生が先端健康解析センター長となり、宮崎泰斗先生が感染管理部副部長として、実務を担当しています。卒後研修センターから、松崎淳人先生、吉原彩先生が学生教育外来を実施し、外来実習をサポートしてくれました。大森病院の多くの診療科のサポートを頂き、現在、



総合診療内科 瓜田純久



総合診療外科 島田長人教授

総合診療科で診療する患者さんは、日本の大学病院総合診療科のなかで最も多くなっています。病棟は指導医-レジデント-研修医によるチーム体制が確立し、朝カンファ、チーム回診、教授回診、全体カンファによる診療・教育体制となっています。

専門医資格を持っていても、患者さんが「診てほしい」と思えなければ、その力量を発揮できず、自分のための資格になってしまいます。「何でも診たい、治したい」というマインドは医師を志す原点ですが、近年、原点が大きく揺らいでいるように思えます。相互作用解析の必要性から複雑系科学へと進化していった物理学と異なり、臨床医学は未だにパーツに分ける還元論的手法が隆盛を極め、臓器還元論が主流です。しかし、病名はヒトが定義した「集合」であり、その元（げん）である症候が揃っていない患者さん、集合に納まらない合併症をもつ患者さんは少なくありません。還元論では同じ集合に含まれる元の比較は容易ですが、集合同士の比較は難しく、どの集合にも収まらない症状をもつ患者さんは診療する場がなくなってしまいます。消去法での鑑別診断は、元（症候）が含まれない補集合を探す手法であり、全体集合としての複雑な病態を考察する際、連続的推論を中断させてしまうこともしばしばです。ガイドラインやアルゴリズムを熟知することは重要ですが、総合診療においては、臓器に共通するシステムとその単純な法則から病態を推定する力を涵養し、臨床推論を繰り返して問題を解決できる医師の育成を目標としています。

思考回路涵養のため、多くの医局員がサブスペシャリティを持っています。感染症（宮崎、前田）、循環器（石井）、腎（佐々木）、糖尿病（竹本）、がん診療（渡辺、貴島）、消化器（財、中嶋）、外科（島田、本田、高地）など、個性的な医師が活発な議論をしながら、診療を行っています。



頼もしい医局員

左から、竹本育聖、石井孝政、前田正、宮崎泰斗、斎藤隆弘、渡辺利泰、田中英樹、佐々木陽典、山田篤史、小松史哉、佐藤高広、河越尚幸

す。また、臨床での疑問点を解決するため、研究活動も活発に行っています。各論では誤嚥性肺炎、消化管感染症、微量元素、ビタミン代謝、消化吸収、糖尿病、透析治療について、また総合診療の大きな支えとなる基礎医学領域では、生体ガス分析、がんの糖代謝、腫瘍形態のフラクタル解析、セルオートマトンによる感染症伝搬の解析、トポロジー解析による原発不明がんや不整脈の検討、ゲーム理論による腸内細菌の解析、グラフ理論によるセンチネルリンパ節解析など、臨床推論をフリーハンドで行う様々な手法を用いて研究を進めています。

総合診療科は個々を尊重し、各々が考え抜いた診療・研究を行って力を発揮することにより、「総合診療科」という新たな生命体のような機能的集団へと進化していきたいと考えています。重ねてご指導いただきたく、お願い申し上げます。指導医の詳細は You Tube「東邦大学 総合診療」でご覧いただけます。

(瓜田純久)

DOI: 10.14994/tohoigaku.2017.64-03-206